

概念の実践的な足場

——『物質と記憶』の「一般概念」論をめぐって——

永野 拓也

ベルクソンは諸著作を通じて、概念的な思惟、とりわけカント的な意味での悟性¹について、その根ざすところは生きるための活動であるとする。つまり、ベルクソンは概念的な思惟をプラグマティックな本性のものと考えるのであり、認識たる限りの認識の名に値するとはみなさない。こうした概念的思惟に対する批判的な見解は、ベルクソンなりの實在論に裏打ちされている。ベルクソンにとっての實在性とは、一方

では、それなりに高い緊張度を持つ有機的な統一性としての精神あるいは生命であり、また他方では、極限的に弛緩した精神あるいは生命としての物質であって、これらは概念的な分析には適さず、一拳に直接与えられるがままに把握される以外の仕方、認識されることはないと考えるのである。

このように概略を述べると、ベルクソンの概念的思惟に対する批判は、概念的思惟にとつては外なる實在の側に立つて行われるように見えるであろう。しかしこの批判は、実のと

ころ、概念的思惟に内在することから始められる。内在的な探求の結果として、一方には概念的思惟の根源にあり、概念的思惟における統一性を超える統一性としての精神が見出され、他方では、概念的思惟の基礎としての物質的なものの、自動的で反復的な同一性が見出されるのである。

ベルクソンがこのような仕方で行うのは、第一著作以来のことである。ただ、概念的思惟そのものを扱うのは、第二著作『物質と記憶』以来であると考えてよい。そこで本稿では、『物質と記憶』を中心に、特に概念的思惟にとつての基礎に、自動的で反復的な同一性がいかに見出されるかを検討したい。概念的思惟のもう一方の根拠、より根源的な出所としての、有機的統一性については本稿では触れないこととするが、この統一性の働き方についてのベルクソンの見解を理解するためにこそ、自動的・反復的なものの概念的思惟にとつての不可欠さを、確認しておかねばならない。

一、概念をめぐるベルクソンの立場

概念的な思惟を、「物質と記憶」は「一般概念 (Generalé)」の名の下に考察する。J・トーが微細に分析するように、「物質と記憶」において、「概念」に関してベルクソンのとる立場は、通俗的な意味での「唯名論」でもなければ、「実念論」でも「概念論」でもなく、このように通俗的な仕方でも図式化しようとする複雑に見えるのは、ここでの概念的思惟についての理論が、「物質と記憶」第一章の知覚論に大きく依存するがゆえのことである。ここから、「類似を消して差異を強調する」という悟性の行き方が、説明されることになる。

概念的思惟についてのベルクソンの考察は、概念を最終的な哲学の武器と考える立場に対する、ベルクソンの批判と連動している。それゆえ、ベルクソンの議論は対象となる概念的思惟の水準と、対象の背後の水準、つまり議論の成立する水準の、両方に及ぶものとなる。この事情は、哲学的思惟として当然ではあろうけれども、予め指摘しておきたい。加えて、「形而上学入門」から、次の箇所を参照するのがよいと思われる。この論考は、最晩年の著作「思想と動くもの」に収録されているが、発表は「物質と記憶」の七年後の一九

〇三年に遡る。

概念は〔中略〕通常一対で進み、二つの矛盾するものを表象する。実在には、同時に二つの観点から捉え得るものはないし、したがって、対立する二つの概念に同時に包摂される (se subsumer) ものものない。これにより、ひとつの理説とそれに反する理説を、論理的に調停しようということになるが、これは無駄である。その理由は単純至極であり、概念によっても観点によっても、事物を作ることには、永久にできないからである。しかし対象からはじめて、この対象が直観 (Intuition) によって把握されるならば、多くの場合に苦もなく、二つの矛盾する概念に移行することができる。そしてそうなること、実在から理説とそれに反する理説が出てくるのを見ることになるから、ついでに、これらの説がどう対立し、どう調停されるか、ということが把握されるのである (1409/198)。

J・トーの指摘するとおり、この箇所は「批判の場面においてベルクソンを導く思惟を驚くばかりに提示している」と言える。概念を対象としつつ、同時に概念を拠り所とした学説を考察することの、ベルクソン哲学にとっての重要性を、

この一節は述べていると言つてよいであろう。どのように重要かといへば、こうした考察により、概念そのものの限界が指摘できると同時に、概念を対象とする概念的理論の不十分さが精確に弁別できるということである。こうして、概念そのものと、概念的思惟を拠り所にしつつ対立する諸理論とを、ともに利用しつつ、対象に密着した「直観的」認識を準備することができることになる。ひとたび、経験的研究が再開されれば、ベルクソンは概念的思惟が原則的に把握できない、「質的多数性」「精神的綜合」としての「持統」を、経験のうちで根源的な統一性として捉え直し、そこから出発して、概念的思惟を含めた様々な事件の発生を捉えることができる。こうして、さまざまの経験を、概念的な思惟の陥る類の矛盾には陥らずに説明するとともに、概念的思惟が陥る矛盾をも説明するという、経験的かつ直観的な思惟の優位性が明示されることになるのである。

ここに「形而上学入門」を引用することには、テクストの内的な連関のみならず、テクストの外に展開した一つの事件にも、その根拠がある。「物質と記憶」の発表後、一八九八年に、『形而上学・道徳雑誌』(Revue de métaphysique et de morale)の誌上で、ベルクソンは手厳しい批判、というよりは、伝記によれば「まさに論告」を受けることになるのである。批判者はB・ジャコブであり、彼が弾劾するのは、今述べたような、

『物質と記憶』に見られるベルクソンの方法に他ならない。^⑤ ジャコブは、ベルクソンの論法を、「デカルトが新たな解釈を与えた理性性と、ロックが援用する経験とを新たに解釈し、敵対者いづれの肩も持たない」と、皮相に定式化されるライプニッツの論法に引き寄せ、「折衷主義 (Éclectisme)」として批判する。ジャコブを始め、『形而上学・道徳雑誌』は当時、明らかに「独断論的理性主義 (Rationalisme dogmatique) の復興」、つまり「カントが予見し、次いでフィヒテとヘーゲルによつてより明瞭に定義された、より下位の項からより上位の項へと、一方を他方のうちへと解消しないで進んでゆく、あの綜合の方法を復興すること」を標榜していた。「どちらの肩も持たない」まま、対立する立場を調停するのでは、「総合の方法」たる弁証法ではないとして、彼らはベルクソンを攻撃したのである。ジャコブのこの「論告」は、一九〇〇年から本格化する、「新哲学 (philosophie nouvelle)」をめぐる論争の火付け役となる。この論争は「形而上学道徳雑誌」上および同誌の編集者らによつて主催される「国際哲学会」(Congrès international de philosophie)、またこれを引き継いで一九〇一年に発足する「フランス哲学会」(Société française de philosophie)において展開した。論争をリードしたのは、L・ブランシュヴィック、L・クーチュラらを敵にまわしてベルクソンを代弁する、ベルクソンの弟子の一人E・ルロワ

であったが、ベルクソン自身、数度にわたって論戦に加わった。上に引用した「形而上学入門」は、この一連の論争を経て、「物質と記憶」にいたるまでの自身の方法を弁明するために書かれたものである。

二、一般化と抽象の循環

さてわれわれは、「物質と記憶」のうちで、「一般観念」をめぐるベルクソンの考察を検討してゆこう。「形而上学入門」が「ひとつの理説とそれに反する理説」と呼ぶものは、ここでは「唯名論 (nominalisme)」と「概念論 (conceptualisme)」である。二つの立場は、歴史的な経緯を差し引いて、全く単純化された形で提示される。ベルクソンは哲学史として論争を追うわけではなく、二つの理説の標榜する利点を、文字通りに解釈して極限まで推し進めることにより、共通の欠点を暴きだし、自身の知覚論をこの欠点と対置するのである。これはジャコブ言うような皮相な折衷主義などではなく、むしろトールの指摘するように、「カントの言う意味での弁証論 (dialectique)」ではないだろうかと思われる。

まず、ベルクソンは、議論の領域を次のように限定する。「ここで、一般観念の問題を、まとめて解決しようというのではない。一般観念の中には、知覚を唯一の起源とはせず、

物質的対象とは非常に遠くからしか関係しないものがある。これらはさておくとして、われわれは、われわれが類似の知覚 (la perception des ressemblances) と呼ぶものに基礎を置く一般観念を考察しよう」(296/173)。議論の全体を知る者にとつてみると、この限定は論点先取すれすれである。単に「知覚に基礎を置く」とは言わず、ベルクソンは「類似の知覚の知覚に基礎を置く」と述べているからである。しかし、彼が最初から「類似の知覚に基礎を置く」ものに一般観念を限定していることに注意しておくのは、彼の論点を理解する上で有効であろう。

さて、このように限定された問題領域で、ベルクソンは当の二つの立場への批判を開始する。まず、彼は「一般観念をめぐって生ずる心理学上の困難」を、ひとつの循環論として、次のように要約する。「一般化する (generaliser) には、まずは抽象し (abstraire) なくてはならない。しかし役立つように抽象するには、すでに一般化することができるのでなくてはならない」(297/174)。唯名論と概念論は、この循環を軸として、「特に相手の立場の不十分さを、自分の立場の利点とする」(Ibid.) ような関係にあるとされる。唯名論については、次のように言われる。

実際、唯名論は、一般観念のためにその外延しか保持せ

ず、一般概念のうちに、個別的対象の、開かれた無際限の系列しか見ない。したがって唯名論者にとつては、概念の統一性は、われわれが無差別にあらゆる判明な対象を指示するための象徴 (symbole) の同一性でしかありえないであろう (297/174)。

存在論的には、外延の存在しか認めない立場として、ベルクソンは唯名論を提示している。ところで、象徴、つまり語が統一の機能を果たすのであり、同じ語によって指示される、ということにしか外延の共通性はないのであって、実在である外延そのものうちには、統一性の原理は一切存在しないとすれば、語はしかじかの対象を指示する、という一種の志向的な性格を持つとしても、この志向は全く任意であつてよいので、規約的な本性の志向であると言えるであろう。だからこそ、一般概念の内実が、「個別的対象の、開かれた無際限の系列」たりうるのである。

しかし指示が規約的であるとすれば、語にしかじかの対象を指示させるのは、語というよりもむしろ、思惟であることになる。ベルクソンは見る。そこで彼は、語に一定の外延を指示するようにさせる思惟の過程を、反省的に記述するのである。「彼ら〔唯名論者たち〕の言うところを信じねばならないとすると、われわれはひとつの事物を知覚し、次にわれわれ

は一つの語を与える。この語は、別の無限個の事物へと拡張しようとする能力ないしは習慣 (habitude) に支えられて、それから一般概念へと昇格する」(Ibid.)。ここまでを認めたらうと、ベルクソンはさらに思惟の次元について検討を進め、唯名論における、原則と結果の矛盾を指摘するのである。

だが、語が拡張しつつも、それが指示する諸対象に制限されねばならないとすれば、諸対象はわれわれに、さまざまな類似を提示するのではなくてはならない。この類似が、ひとつの対象を別の対象と結びつけつつ、この語が適用されない全ての対象と、この語が適用される対象を区別するのである。一般化 (généralisation) は、したがって、共通する質についての抽象的な考量なしには、進まないように思われ、次第次第に、唯名論は一般概念を、最初にそれが望んだように外延のみによってではなく、内包によって定義するよう、導かれつつある (197/174)。

上に見たように、唯名論の利点の一つは、「無限個の対象へ」指示を拡張できる、ということであつた。指示を規約に委ねたのも、それゆえである。しかしこれだけでは、経験にもとづき、指示を「制限」することができず、制限するために

は、唯名論が前提しなかつた経験的な因子を導入せねばならず、そうした因子として考えられるのは、およそ、「共通する質」、つまり内包でしかないとベルクソンは主張するのである。しかし内包を認めるのでは、もはやこの立場は唯名論ではない。「この内包からこそ、概念論は出発するのである」(Ibid.)。ベルクソンは唯名論を、自身の原則それ自体によって、内側から崩壊するところへ追い込む。つまり、唯名論は手際よく批判される。というのは、J・トリーの言うように、唯名論はベルクソンの論法、とりわけ経験論的なベルクソンの立場と相性がよいのであり、それは今のところ、唯名論が、個別的対象あるいは外延という形で、隠された本質(essence)を斥け、実存在(existence)しか認めない、という前提においてであると思われる。¹³⁾

さて、ここから「物質と記憶」は概念論の批判に移る。この学説は次のように要約される。

知性は、概念論によれば、個体の表面的な統一性を、様々な質(qualité)へと解消する。これらの質の各々が、質を限定していた個体から切り離され、まさにこのことによつて、ひとつの類を代表するものとなる。それぞれが、現実態において、(en acte)、多数の対象を含むと考えるのではなく、逆に今は、それぞれの対象が、可能

態において、(en puissance)、また、それぞれの対象が、質を虜囚として留めてあるとすれば、留めてある数だけある質として、多数の類を含むことにしようといふのである(297/174-175)。

ベルクソンの要約によると、概念論において、知性は直接、形相ではなく質料の領域で、質を切り出すということになる。ベルクソンの言う概念論は、例えば、知性の作り出す「可知的な種」に先立ち、感性の作り出す「可感的な種」のよなものを介在させることなく、また可感的な種から、能動知性による可知的な種の形成を認めることもなく、結局、本質と実存在とを区別することがない。つまり、ここで知性は、悟性のカテゴリーもトマス的な意味での習慣(habitus)も内に持たず、素手で実存在たる経験的对象へ向かうのである。この点については、彼が諸々の質について、「可能態において」対象のうちに含まれると言ってみても同じである。このように述べることによつて、規定されるのは実存在としての対象の在り方であり、知性の内に、可能態において、概念形成に必要な何らかの形式が存在することにはならないからだ。ベルクソンは後に「創造的進化」第四章において、可感的な実存在の背後にあり、人間の思惟を可能にする第一原因としての神的知性、およびこれを人間に媒介する

能動知性 (vous rouvrakós)、「という考え方を正面から批判するが (761-773/314-328)、『物質と記憶』における、概念論の定式化そのものに、こうした批判の発端があると見てよいであろう。

特に『物質と記憶』のベルクソンにとつて、潜勢的なものとしての物質や記憶は、現勢的なものとしての、人間の知覚と活動の成立条件となるが、現勢的なものと潜勢的なものは、本性において異なり、かつ、ともに現実存在であること、この点は、『物質と記憶』第三章における純粹記憶の存在証明を検討する際に見た通りである。このことはまた、なぜ「実念論」が登場しないのかも説明すると思われる。概念の起源をこの世界の外なる本質に見出す立場は、ベルクソンの立場からすれば、完全な対極にあつて、概念論の影に隠れるのである。こうしてベルクソンは、本質あるいは形相という、質料あるいは現実存在についての形式的認識を可能にするものを、歴史的な概念論における知性から予め奪うことによつて、概念論を定式化するのであり、その意味で、概念論の前提から、一般観念の成立を説明するための主要な武器を奪ひ、むしろ、現実存在しか認めない唯名論の前提に近づけて提示しているのである。

とすれば、最初からこの意味での概念論の破綻は見えていく。厳しく見れば、「内包」としての質は、「共通な質」では

ないことになるのである。

しかし問題はまさに、個別的な質が、抽象 (abstraction) の努力によつてそれだけになつたとしても、最初にこれらの質がそうであつたように個別的なままではないのか、また、これらの質を類へと昇格させるには、精神の新たな営みが必要であり、この営みによつて、精神はそれぞれの質に名前を与え、次いでこの名前の下に、多数の個別的対象を集めるのではないのか、ということである。百合の白さは雪原の白さではない。これらの白さは、雪や百合から切り離されてもおお、百合の白さであり、雪の白さである。これらの白さは、われわれがこれらの白さの類似を考慮して、これらの白さに共通の名前を与えることによつてしか、自身の個別性を捨てることではない。この名前を無制限な数の対象へと適用することにより、われわれは、事物に適用されるにあつて語が求めに行つた一般性を、一種の跳ね返りにより、質へと送り返すのである。だが、このように推論することによつて、最初に廃棄したはずの外延の観点に、戻ることにはならないだろうか。われわれはしたがつて、まったく実際のところ循環しているのであり、唯名論は概念論へとわれわれを導くかと思えば、概念論はわれわれを唯

この通りだとすれば、ベルクソンが規定するところの概念論は、「質の抽象」によつて何をしているのであろうか。百合の白さと雪の白さの個別的差異が消えないのであれば、この百合の白さとあの百合の白さすら、厳密に言えは異なるのではないか。ただ単に、質を対象から抽出するだけでは、これを「共通の」質にすることなど出来るはずがないであらう。

ところで、百合の白さ、雪の白さが異なつていても、歴史的ないくつかの概念論においては、恐らく全く問題はない、とトーは述べる。というのは、質の抽象は、対象の比較によつて、「共通の特性」を導く一般化と平行して行われるか、少なくとも、ある質が無限個の個体に繰返し現れることが可能だ、という前提のもとで、質の抽象が行われると、概念論者ならば考へるであらうから、というのである。つまり、実際の概念論にとつて、抽象された質は、抽象されただけで、「可能態において」一般的となる。しかしこのことをベルクソンが受け入れれば、そもそも循環などない。言い換えると、ベルクソンが知性のレヴェルで、一般化と抽象が一体になることを許さないからこそ、一般化のみ行うことで概念を形成しようとする立場と、抽象のみ行うことで概念を形成しようとする

する立場の間で、循環が生ずることになる。さらに言い換えれば、感性の与件が個別的であり、知性がこれについての概念を用いると見る場合、この概念を作るのは知性だとすれば、経験のみから知性による概念の形成を説明しようとしても、一般化しつつ抽象するための如何なる機能をも、知性のうちに見出すことはできない、とベルクソンは考へるはずである。

つまり、実際の概念論において、概念は概念ならざるものから「作られる」とは考へられず、概念的思维が始まるところから、概念はすでに、一般化でありかつ抽象であり、完全な概念であるはずである。ベルクソンがこうした考へ方を許さないのは、先ほど見たように、彼が本質、形相を認めないからであらう。実際の概念論にとつて、思维の道具は概念でしかない。概念の根拠を概念そのものによつて問うとき、外延的对象への記号の指示の一般化によつてこの根拠を説明しようとする唯名論のように、対象相互の共通性、つまりは一般化に対する制限を、自身の立場の外から得る他ない、という行き詰まりに陥らないようにするには、完全な概念を、能動知性によつてであれ、悟性のカテゴリーによつてであれ、一挙に与えるしかないであらう。

これに対してベルクソンは、唯名論的な行き詰まりを前に、一般化しつつ抽象する完全な概念を一挙に与えるのは、この

行き詰まりに対する解決ではなく、むしろ概念的思惟の外に、概念的思惟の成立根拠を見出さねばならないと考えるであろう。ベルクソンは言う。「一般觀念の明晰な表象は、知性による洗練 (affinement) である」(298/176)。あるいは、「類についての完全な概念化作用 (conception) は、恐らく人間の思惟の特性である」(Did.) 「下線部筆者」。

ベルクソンと實際の概念論との対立は、やがて「創造的進化」において、ベルクソン自身によって、「分析と發生論」という対立として捉えられるようになる。「創造的進化」においてベルクソンは、悟性のカテゴリーの發生論を展開するのである。しかし今は「物質と記憶」にとどまろう。ベルクソンにとって、概念は、これを扱う思惟よりも原初的な条件の下で、形成されねばならないのである。そうだとすれば、ベルクソンは一般化でありかつ抽象であるひとつの機能を、知性の外のどこかに置かねばならない。

三、一般化と抽象の足場

「物質と記憶」の先立つ部分を読む者には、ベルクソンがどこに、一般化であり抽象である機能を見出すかは推測できるであろう。それは感性の領域、特に感覚と運動が一体となった、現在の知覚において、さらには、それを支える身体

の運動メカニズムにおいてなのである。

まずベルクソンは、感性的な事件が個別的である、という前提を覆す。

これら二つの対立する理論〔唯名論と概念論〕を掘り下げると、共通の公準を見つけることになる。これらはどうしても、われわれが個別的対象の知覚から出發することを前提としている。「中略」見かけは明証的であるにもかかわらず、この公準は本当らしくも思われなし、事実と一致もしない (298/175-176)。

知覚からではないとすると、個別性はどこから現れるとベルクソンは言うか。

類についての完全な概念化作用には、われわれが時間と場所との特殊性を消去するための、反省の努力が要請される。だが、この特殊性についての反省、対象の特殊性をわれわれから逃がさぬための反省は、差異に注目する能力を、したがってまさに、イメージについての記憶力を前提とする。イメージについての記憶力は、人間と高等動物との特権であることは確かである (Did.)。

なぜ、記憶力が特殊性、個別的差異に注目する能力なのか。「物質と記憶」によれば、純粹記憶は、日付も順序もそのままに、過去の出来事を全て保存するのである。別の箇所でもベルクソンは、夢みる人が生きるであろうところの、もつとも拡張した純粹記憶においては、詳細を比較すれば全ての記憶が全てと異なる、と述べている(306/186-187)。さらに言えば、詳細さえ無視すれば、どんな記憶も互いに似ていると(Bid)。純粹記憶にのみとどまるならば、概念を成立させるためには、詳細における差異を無視する一般化が不可欠だが、ひとたび詳細を無視しだすと、一般化は果てしなく可能である。つまり、ベルクソンにとって、唯名論がそこから出発し、行き詰まるところの「外延」とは、純粹記憶なのであり、純粹記憶とは純然たる個別性の領域なのである。

概念としての外延の決定不可能に歯止めをかけるのは、「物質と記憶」の場合、純粹記憶に留まって「夢みること」をやめ、活動することであろう。活動に寄りそう記憶力とは、知覚に伴う身体的な態度から出発して、純粹記憶の領域を探る、注意力に他ならない。注意力により、知覚が記憶と二重化して、「判明な知覚」が成立すると「物質と記憶」は見ていること(247-248/111-112)。「のような、記憶力および記憶についての理論をもとに、ベルクソンは次のように述べるのである。「個別的対象の判明な表象は、知覚の贅沢(luxe)で

ある(298/176)。判明な知覚を得て、さらに明晰な一般概念が成立するには、対象の個別性を確立し、個別的と見なされる対象を相互に比較し、対象から個別性を消去するたぐいの反省、つまりは注意力の営みはもとより、J・トーの述べるように、成立した一般概念と対象とをたえず照合する必要がある、論理(logique)や学知(science)が可能でなくてはならない、ということになる。それゆえベルクソンは、「一般概念の明晰な表象は知性による洗練である」と述べるのである。

とすれば、一般化、抽象の由来は既に明らかであると言えるであろう。ベルクソンはこう述べている。「だから、われわれは、個体の知覚からでも、類の概念的理解からでもなく、中間的な認識、目立つ質あるいは類似についての錯然とした感情(sentiment confus)から出発するのである」(298/176)。この「類似についての錯然とした感情」は、人間に限らず、生物一般の持つものであるとされる。「草食動物を惹きつけるのは、草一般(thébe en général)とまで」(299/177)。これは次のように敷衍される。

与えられた状況において、われわれの関心を惹くもの、われわれが最初に捉えねばならないものとは、この状況のうち、傾向や必要に応ずることのできる側面である。

ところで、必要は類似や質へと直行するのであり、個別
的差異はといえば、作り出すのである。この有用な弁別
に、通常は動物の知覚は限定られている(299/176-177)。

要するに、「諸力 (des forces)」として感じられ、蒙られる色
や匂いだけが、動物の外的知覚における、唯一の直接的与件
なのである(299/177)と云うことである。この箇所は、「物
質と記憶」第一章において、純粹知覚をめぐって論じられた
ことの要約であり、その一般観念論への応用である。とはい
え、「物質と記憶」の知覚論に込められる一つの狙いが、一
般観念論の分析では如実に現れるとは言える。特に、ベルク
ソンが次のように述べるときにはそうである。

この類似は、客観的に、ひとつの力として作用するので
あり、まったく物理的法則のおかげで、同一的な反応を
惹き起こすのである。この物理的法則は、同じ深い原因
からは、総体における同じ結果が生ずることを期待する
ものである (Ibid.)。

つまり、「酸が塩から塩基を引き出す、この(炭酸塩が石灰
に作用する際の)働きと、様々な土から、植物が自身を養う
のに役立つはずの同じ要素を引き出す行為との間に、本質的

な差異はない」(Ibid.)と、ベルクソンは述べるのである。こ
の考え方は、概念の基礎を自然のうちに置くという意味で
は、概念論と類縁を持ち、むしろ唯物論的実在論に傾斜して
いる。

実際、自然に概念の基礎が内属する、というこの考え方は、
「思想と動くもの」において、ベルクソンが一般観念を
再び論ずるときには、より鮮明なものとなり、物理現象は、
類似というよりは同一性を実在性として備えると言われるの
である(1299/59)。だが、「思想と動くもの」に到るまでには、
ベルクソンは「創造的進化」の展開する形而上学において、
知性と物質の発生を論じ、他方で、生命の躍動とはどの
ようなものであり何をするのかを提示して、類としての実在
性と、法則としての実在性とを区別しつつ、自然における一
般観念の基礎を説明しなくてはならない。ただ、「物質と記
憶」は「創造的進化」における形而上学の展開を、心理学の
レヴェルで準備するとは言えるであろう。「物質と記憶」に
おいて、一般化と抽象は、知性によって洗練されるに先立ち、
知覚において感じられるものであり、知性が概念操作を始める
ときには、すでにこうした原初的な一般化と抽象が与えら
れていると、ベルクソンは述べるのである。

物質の化学反応が引き合いに出されるところから分かるよ
うに、生物において、「感情」として、「錯然」と感じられ

る一般化と抽象とを支えるのは、物理現象と同一の因果関係によって結ばれる身体の運動装置の同一性であるということ、このことも、「物質と記憶」の第一章の述べることである。ベルクソンは次のように言う。「実際、われわれの神経系の用途を、その構造から帰結すると思われるままに反省してもらいたい。われわれは、非常に多様な知覚の装置が、中枢を経て、全て同じ運動装置と連繋しているのを目にする」(300/178)。この点に関して、ベルクソンが「感官の教育」について述べたことの概略を示しておこう。「物質と記憶」第一章において、われわれの感官は、それぞれがそれなりに一つの知覚であり、感官相互を比べれば、そこには質的な差異が歴然としているとベルクソンは見ている。だが、われわれは感官を、異なるままに放置するのではない。身体の運動装置の調整、つまり身体的習慣の獲得を通じて、感官は教育され、物質をその都度近似的に再構成するために、知覚という形で統一される。一般概念を扱うこの箇所でも、ベルクソンは次のように述べる。

感覚は不安定である。つまり感覚は、もつとも変化に富んだニュアンスを帯びることがありうる。反対に運動メカニズムは、一度配備されると、変わらぬままに、同一の仕方では機能する。諸知覚についてはそれゆえ、それら

の表層の細かい点であたう限り異なっていると仮定してよい。だがこれらの知覚がそれぞれ同一の運動反応に連なり、有機体がそこから同じ有用な結果を引き出して、知覚が身体に同一の態度を刻印するということになると、何らかの共通のものがそこから取り出され、こうして一般概念が、表象されるに先だって、感じられ、甘受されることになるだろう (Ibid.)。

感覚が多様であることを、ベルクソンは否定はしない。しかし、概念的思惟にとつての原初的な与件は、この多様な感覚そのものではなく、既に何らかの「感官の教育」を経て、安定した身体に基づく知覚である、とベルクソンは考えるのである。「思想と動くもの」の説明によつてこの点を補足すれば、ベル (sonete) を鳴らすのが、風であろうと、拳であろうと、ベルにとつては、両者は同一の、鳴るといふ運動のための刺激であり、「ベル鳴らし (sonneur)」である (1297/56-57)。雀の匂いであろうと、鼠の匂いであろうと、あるいは雀の形であろうと、鼠の形であろうと、猫にとつては襲うという運動を惹き起こすだけである。J・トリーの言うように、運動によつて統御されたこの知覚のレヴェルでは、一般性とは活動の一般性 (例えば猫の爪や四肢や牙や胃の活動の同一性) であり、抽象とは、活動を及ぼす相手の特性 (例えば、

雀や鼠の、猫にとって捕獲可能な速度や大きさ、消化の可能性)の抽象である。身体活動と知覚に見出されるのは、こうして、「感じられ、生きられる類似、あるいは、お望みならば、自動的に演じられる類似である」(300/178)と言われる。

四、一般観念の発生論

この、生きられる一般性と類似を出発点として、ベルクソンは明晰な一般観念の発生を次のように辿る。

精神の戻ってゆく類似は、知的に認知され、思惟される類似である。この進展の過程で、悟性と記憶力の二重の努力により、個体の知覚と、類の概念的理解とが構築される。つまり、記憶力が、自然発生的に抽象された類似に区別を接木し、悟性は類似の習慣 (*habitude des ressemblances*) から、一般性の明晰な観念を引き出すのである。この一般性の観念は、最初は、様々な状況における態度の同一性についての、われわれの意識でしかなかった。一般性の観念とは、運動の領域から思惟の領域へと遡る、習慣そのものであった。しかし、習慣によってこのように機械的に描き出される類から、この働きそのものについての反省を成し遂げることにより、われわ

れは類の一般観念へと移行するのである (301/179)。

ここで悟性と記憶力、と言われるものを一括して、「物質と記憶」第二章は「注意力」と呼んでいると考えてよいであろう。習慣から出発し、この習慣を思惟の領域へ移し、注意力によって、これを観念へと昇格させること。ベルクソンは一般観念の形成を、このように説明するのである。

J・トーは、運動的習慣という現実存在から出発し、「思惟の領域へと遡る習慣」として、一般観念の形成を説明するこのような仕方は、唯名論的な外延主義に近く、さらに、ベルクソンが言語の成立を、一般観念の、成立ではないにしても、定着にとつて抜き差しならないものと見ている点で、一層、唯名論的であると指摘している。これは正しいであろう。ベルクソンは言語の成立について、一般観念の成立についての説明をもとに、次のように粗描するのである。

そして、ひとたびこの観念が構成されると、われわれは今度は意図的に、数限りない一般的な知見を構築する。

この構築の働きの細部にわたるまで、知性の歩みに追隨することは、ここでは必要ではない。われわれは次のように述べるにとどめよう。悟性は、自然の労働を模倣しながら、自身も、今度は技巧的な (*artificiels*) いくつか

の運動装置を備えつけたのであり、このことにより、この限られた数の運動装置を、無制限に多数の個体へと対応させたのである。これらのメカニズムの総体が、有節言語の能力 (*parole articulée*) なのである (301/179)。

このように、ベルクソンは、言語能力の由来を、習慣獲得そのものに求めている。同じことは、一八九二—一八九三年の心理学講義第十七講の次の箇所でも、より概略的に述べられている。

自然が、ある意味で、自身の内部に溶接しておいた諸運動を、人間は分離し、孤立させ、それらの運動をそのものとして実行することができる。人間は、ある意味で俳優になれるからこそ、言語を創造することができる。つまり、記号を作り出し、運動を作り出すのであるが、これらの記号や運動の目的は、何かを得ることにあるのではなく、何かを単に表すことにあるのである。この純粹に人間的な能力は、われわれが分離の一般的な能力と呼ぶものの一側面に他ならない (C II 386)。

他方、右に見るように、一般観念を、安定した形で無限に増殖させるのは、言語であるとベルクソンは考えている。「物

質と記憶」は、「精神が類を構築する働き」(301/179) が、「無限に続けられ、かつ完成されることは決してない」(301/179-180)と、また「不安定で消えやすい表象を形成する」(301/180)と述べる。この不安定さは、純粹記憶そのものが、「経験の当初から」(301/179)、「個体の弁別」(*bid*)を可能にしており、またこの個体の弁別は、「安定したイメージを構成する」(301/180)ということに由来する。その結果、記憶の基底にある純粹記憶にあつては、一般観念は、「無数の個別的イメージという、明瞭な相を帯びるのであり、一般観念の壊れやすい統一性は、まさに無数の個別的イメージへと分断されようとしている」(*bid*)ということになる。このことは、純粹記憶における、一面では全てが全てと異なるが、他面では全てが全てと似る (306/307/186/187)、という特徴に由来するであろう。一般観念の安定は、ひとえに身体的な態度の安定にかかっているとと言えるであろう。

意識的な習慣が獲得され、維持されるならば、この安定はより確かな保証を得ることになるであろう。言語的な習慣の獲得は、一面で、この安定を保証する。一般観念は、「たえず、結晶して (*se cristalliser*) 発話された語になろうとす」(302/180)とベルクソンは述べるのである。さらに、「無限の状況に有限数の振る舞いで反作用する、というのは、そもそも身体的態度一般の特徴である。この身体的態度を意図

的に作り出すところに、習慣の意義がある。ひとたび、一般概念というものが成立すれば、これが習慣という身体的態度の製作と運動することにより、人間は無限の一般概念を作り出すことになる。『物質と記憶』は述べるのである。このように、習慣によって成立する言語というものが、人間の概念の思惟を支えるとベルクソンは考えており、この点では、『物質と記憶』において、身体の運動機構が知覚に対する関係は、言語能力が知性に対する関係に等しい、とするＪ・トリーの指摘は正しいであろう。

五、結語

ベルクソンが『物質と記憶』において一般概念の成立を説明する箇所については以上である。ここでは、概念的思惟が、同一的活動を反復する習慣を、まずは自らの由来において、次いで自らの発展のために、足場としていることが指摘されている。『創造的進化』に至ると、実践的な足場を持つ概念的思惟は、「知性」の名の下に、その根源としての生命という統一性から説き起こされ、発生論的に考察されることになる。『創造的進化』において、ベルクソンは「カントは夢想だにできなかった」(796/358)と彼の言う「悟性のカテゴリーの発生を迫ること」(Ibid.)を試みるのである。『物質と

記憶』第四章に、ベルクソンは、自身の哲学の方法について、「實在する曲線についてわれわれが見出す無限に小さな要素によって、これらの要素の背後の闇に拡がる曲線そのものの形を再構成すること」(321/206)を試みるものだと説明している。これに即して言えば、『物質と記憶』においては、概念的思惟はまだ「曲線そのもの」としては再構成されていないであろう。とはいえ、『物質と記憶』は、概念に内在して進む哲学については、概念的思惟の足場である習慣への無自覚な依存という点について、批判を繰り出すことになるのである。

凡例

ベルクソン・テクストを引用する場合、つぎのような記号を用いた。(1) 著作については *Œuvres*, PUF, 1959, を底本としたが、同時に *Quadrige* 版におけるページ番号を記した。引用後の丸括弧内の数字のうち、/ の前が前者のページ数、後が後者のページ数である。(2) 講義集は *Bergson, Cours II*, PUF, 1982, ed. par H. Hilde, および *Bergson, Cours III*, PUF, 1995, ed. par H. Hilde, を用いた。ページ数は、前者については CII、後者については CIII を用いて示した。

注

(1) ベルクソンには「悟性 (intelligement)」と「知性 (intelligence)」を厳密には区別するような定義はない。特に、悟性という語が用いられるときには、程度問題ではあるが、専ら概念的な思惟が想定されていると見てよいであろう。これと並んでベルクソンは特に『物質と記憶』においては、「構想力」(imagination) という語を用いており、概念的思惟については悟性が担い手であるのに

対して、等質的な時間・空間を扱う能力が構想力と呼ばれるのである。この対立は、しかし過渡的なものと思われ、やはりカントを想定してのものであると思われる。他方、等質的な時間・空間を扱う概念の思惟つまり、カント的な、あるいは「物質と記憶」の意味での構想力を、概念の思惟としての悟性とは不可分のものとして捉えた能力を、「創造的進化」のヘルクソンは「知性」と呼ぶと思われる。

- (2) Theau, Jean, *La critique bergsonienne du concept*, PUF, 1968, pp. 318-325. 以下のわれわれの検討は、この研究書に与えらるるが大部分。
- (3) 「把握する」*comprendre*の意味する *subsumer* がカント的な用語であることに、ヘルクソンは直接的であると思われる。近年刊行されたヘルクソンのカント論を参照。「原則的分析は、概念の、悟性の対象への適用を扱う。つまり、判断力を扱う。このは、カントにわれわれ判断するところには、「把握する」*comprendre* (*subsumer*)」つまり、一つの事物が、与えられた規則に従うか否かを判別することだからである。(C III 159)。「形而上学入門」の時点まで、カント的な仕方と規定される概念的思惟に対しての、ヘルクソンの批判がある。われわれは注目をそそぎたい。
- (4) Theau, Jean, *Op. cit.*, PUF, 1968, pp. 302-303.
- (5) Soulez, Philippe, Worms, Frédéric, *Bergson*, PUF, 2002, p. 83.
- (6) Soulez, Philippe, Worms, Frédéric, *Op. cit.*, p. 86. マント自身論 *Le Kantisme*。Jacob, Benjamin, *La Philosophie d'hier et celle d'aujourd'hui. Revue de métaphysique et de morale*, 1898, pp. 175-176.
- (7) Soulez, Philippe, Worms, Frédéric, *Op. cit.*, p. 83.
- (8) Soulez, Philippe, Worms, Frédéric, *Op. cit.*, p. 85. マント自身論 *Le Kantisme*。Jacob, Benjamin, *La Philosophie d'hier et celle d'aujourd'hui. Revue de métaphysique et de morale*, 1898, p. 175.
- (9) Soulez, Philippe, Worms, Frédéric, *Op. cit.*, pp. 87-90.
- (10) *Mélanges*, PUF, 1972, p. 418, pp. 428-435, pp. 463-507. 「新哲学」論争の経緯と争点については、以下の論文に詳しい。杉山直樹「新哲学」論争について、「徳島大学総合科学部人間社会文化研究」。

第四卷「六七頁—一二頁」

- (11) Theau, Jean, *La critique bergsonienne du concept*, PUF, 1968, p. 303. トーは、「創造的進化」最終章における哲学史的考察も、基本的な方法としては同じであると述べているが、これは適切であろう。哲学史の固有な名を上げてあるが、ヘルクソンの哲学史的論者は、歴史学・文献学的ではなく、むしろ弁証論的である。われわれは、同じことが、心理学講義や形而上学講義、哲学史講義にも言える。この著作を詳細に引用しながら議論を進めるのではなく、彼らの主張を骨格にまで切り結んで、互いに突き合せるのである。
- (12) Theau, Jean, *Op. cit.*, p. 307.
- (13) Theau, Jean, *Op. cit.*, p. 321.
- (14) Theau, Jean, *Op. cit.*, p. 304-306. トーはトーの指摘を踏襲するが、彼は恐らく、「創造的進化」の第四章を意識しながら、この「物質と記憶」の箇所を解釈している。われわれには、この着眼は正しいと思われる。
- (15) Theau, Jean, *Op. cit.*, p. 305, p. 310.
- (16) Theau, Jean, *Op. cit.*, p. 310.
- (17) Theau, Jean, *La critique bergsonienne du concept*, PUF, 1968, p. 311. トーは、この一文だけ取り上げれば別段新しいとは思われない。マント自身にもトマスにも、類似の表現があるのだが、この一文を支える「物質と記憶」第一章でのヘルクソンの思惟は彼らとは徹く異なるものだと指摘しよう。Theau, Jean, *Op. cit.*, p. 312.
- (19) Theau, Jean, *Op. cit.*, p. 319-320.
- (20) Theau, Jean, *Op. cit.*, p. 318.
- (21) Theau, Jean, *Op. cit.*, pp. 322-324.
- (22) Theau, Jean, *Op. cit.*, p. 322.

※本稿は、平成十五年度筑波大学学内プロジェクト研究助成費（奨励研究（準研））による研究成果の一部である。
 （ながの・たくや 熊本電波工業高等専門学校）